

【旧約聖書日課】出エジプト記 18章13～27節

¹³翌日になって、モーセは座に着いて民を裁いたが、民は朝から晩までモーセの裁きを待って並んでいた。¹⁴モーセのしゅうとは、彼が民のために行っているすべてのことを見て、「あなたが民のためにしているこのやり方はどうしたことか。なぜ、あなた一人だけが座に着いて、民は朝から晩まであなたの裁きを待って並んでいるのか」と尋ねた。¹⁵モーセはしゅうとに、「民は、神に問うためにわたしのところに来るのです。¹⁶彼らの間に何か事件が起こると、わたしのところに来ますので、わたしはそれぞれの間を裁き、また、神の掟と指示とを知らせるのです」と答えた。¹⁷モーセのしゅうとは言った。「あなたのやり方は良くない。¹⁸あなた自身も、あなたを訪ねて来る民も、きっと疲れ果ててしまうだろう。このやり方ではあなたの荷が重すぎて、一人では負いきれないからだ。¹⁹わたしの言うことを聞きなさい。助言をしよう。神があなたと共におられるように。あなたが民に代わって神の前に立って事件について神に述べ、²⁰彼らに掟と指示を示して、彼らの歩むべき道となすべき事を教えなさい。²¹あなたは、民全員の中から、神を畏れる有能な人で、不正な利得を憎み、信頼に値する人物を選び、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長として民の上に立てなさい。²²平素は彼らに民を裁かせ、大きな事件があったときだけ、あなたのもとに持って来させる。小さな事件は彼ら自身で裁かせ、あなたの負担を軽くし、あなたと共に彼らに分担させなさい。²³もし、あなたがこのやり方を実行し、神があなたに命令を与えてくださるならば、あなたは任に堪えることができ、この民も皆、安心して自分の所へ帰ることができよう。」²⁴モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、その勧めのとおりにし、²⁵全イスラエルの中から有能な人々を選び、彼らを民の長、すなわち、千人隊長、百人隊長、五十人隊長、十人隊長とした。²⁶こうして、平素は彼らが民を裁いた。難しい事件はモーセのもとに持って来たが、小さい事件はすべて、彼ら自身が裁いた。²⁷しゅうとはモーセに送られて、自分の国に帰って行った。

【使徒書日課】使徒言行録 16章11～15節

¹¹わたしたちはトロアスから船出してサモトラケ島に直航し、翌日ネアポリスの港に着き、¹²そこから、マケドニア州第一区の都市で、ローマの植民都市であるフィリビに行った。そして、この町に数日間滞在した。¹³安息日に町の門を出て、祈りの場所があると思われる川岸に行った。そして、わたしたちもそこに座って、集まっていた婦人たちに話をした。¹⁴ティアティラ市出身の紫布を商う人で、神をあがめるリディアという婦人も話を聞いていたが、主が彼女の心を開かれたので、彼女はパウロの話を注意深く聞いた。¹⁵そして、彼女も家族の者も洗礼を受けたが、そのとき、「私が主を信じる者だと思いでしたら、どうぞ、私の家に来てお泊まりください」と言ってわたしたちを招待し、無理に承知させた。

【福音書日課】ルカによる福音書 5章1～11節

1イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。2イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。4話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。5シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。6そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびたしい魚がかかり、網が破れそうになった。7そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。8これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

その舟に乗ろう【こども説教のために】

洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられた主イエスは、荒れ野で四十日の誘惑をお受けになられると、神の国の福音を宣教するお働きを始められました。その働きは、お一人で始められたことでした（ルカ4章）。

主イエスの宣教者としての評判は上々であったようです。主イエスから神の言葉の教えを聞こうと、その日も、多くの人々が押し寄せてきていました。そこは、湖の畔でした。町の雑踏を避けて人々に教えるには、そこがよかったのでしょう。ふと、主イエスは二そうの舟に目を向けられました。漁師たちが仕事を終えて、網を洗っています。主イエスは、教えを中断されると、彼ら漁師の一人、シモンに声をかけます。「わたしを、あなたの舟に乗せてくれないか。岸から少し漕ぎ出して、岸辺の彼らに神の言葉を語りたい。」後に「ペトロ」と呼ばれるようになる漁師シモンと、彼の仲間であるヤコブとヨハネの兄弟の、主イエスとの出会いは、このようなものでした。

主イエスの用意された舟に乗せられたのではありません。「あなたの舟と一緒に乗せてほしい」。それを受けるのも、受けないのも、自由です。けれども、お乗せしなければ、何も始まりません。あなたの人生の舟に主イエスをお乗せして、沖へ漕ぎ出したとき、新しい何かが始まるのです。

「主よ、わたしから離れてください」

主イエスから神の言葉を聞こうと押し寄せてきていた人々の中からではなく、その傍らで自分の生業とする働きに勤しんでいた漁師たちを、主イエスは、ご自分の最初の弟子とされました。漁師たちは、確かに、人々の集まってきたところの近くにいたのでしょう。けれども、神の言葉を聞くことに熱心であったわけではなかったのです。いいえ、彼らも安息日には会堂で町の人々と共に御言葉の朗読を聞く礼拝にあずかっていたでしょう。けれども、それ以上ではなかったのです。その彼らのいわば懐に入り込んでこられたのが、主イエスでした。

新年1月1日が日曜日から始まる巡りの年になると、思い起こすことがいくつもあります。28年前の1995年、1月15日は「成人の日」でしたので、翌16日は振替休日となる連休でした。当時大学院で生物学の研究をしていたわたしは、その連休に兵庫にいるはずでした。県立の博物館を会場に、関わっていた研究会の大会が開催されることになっていたからです。研究会は15～16日の二日間で、希望者は翌17日まで有馬温泉で開かれる懇親会に参加することになっていました。ところが、前年末になって会場の都合で、開催が3月に延期になっていたのです。わたしが向かわなかった兵庫で、その1月17日の朝、阪神淡路大震災が発生しました。その後、多くの人がボランティアに手を挙げ、実際に現地に入った者も少なくありませんでした。わたしはというと、内心後ろめたさのようなものを感じながら、延期になった研究会が開催できるのかということのほうを心配していました。まもなく、予定通り3月の祝日に合わせた日程で開催されることが知らされました。そして、二か月後、わたしは、地下鉄サリン事件が発生して大騒ぎになっていた日の夜、東京から夜行バスで兵庫の会場に向かったのです。ただ、懇親会まで参加した後、わたしは、研究者仲間と別れて一人、神戸の町を歩いていました。どこもかしこもブルーシートが掛けられ、潰れた建物がそのままになっている町を、わたしは、ただひたすら見て歩いたのです。そうせずにはいられませんでした。翌年、大学院を中退して神学校に進むことを決意したのは、それから三か月経った6月のことです。

両親が信者であったわたしは、確かに日曜日に教会に行く生活を当たり前にしていました。たくさん活動や奉仕にも参加していましたし、評判の人がゲストで来られれば、おもしろがって話を聞いていました。けれども、自分の生き方を主イエスに問われていると真剣に考えたのは、あのときが初めてでした。何度も「主よ、離れてください」と抵抗しましたが、抵抗しきれなくなったのです。「恐れることはない」。その言葉を聞いたと思えたのは、6月のある日、教会学校礼拝に奉仕者として参加していたときのことでした。

舟をいっぱいにして

主イエスは、お一人で宣教活動をなさっていたときに、すでに評判となって、多くの人が押し寄せてきていたのです。そうであれば、活動を円滑に進めるためにも、協力者やご自分のチームが必要だったかもしれません。活動をさらに広めるための後継者を育てる必要もあったかもしれません。

しかし、それにしては、主イエスが選ばれた弟子たちは、とても心もとない者たちばかりであったように思われます。金勘定の得意な者はいたようですが、どちらかと言えば、弟子たちの多くはいつも、主イエスの足を引っ張るようなことばかりしていたのです。果ては、主イエスが逮捕され、十字架刑に処せられることになる道筋を付けたのも、逮捕された主イエスを見捨てて逃げてしまったのも、弟子の中の弟子である十二人の者たちでした。主イエスが十字架の上で息を引き取られたとき、そばに付き添ったのは、幾人かの女の弟子たちだけでした。そういうことであれば、主イエスは、あのあまり当てにならない男ばかりの十二弟子ではなく、せめて半分は女の中から十二弟子を選んでおくべきだったのではないのでしょうか。

けれども、主イエスが十二弟子として選ばれたのは、やはりあの十二人でなければならなかったのでしょうか。シモン・ペトロを筆頭とする漁師たちを中心とした、寄せ集めのような弟子たちです。彼らのような者たちが、主イエスの旅の道連れでした。

彼らは皆、主イエスご自身が近づいて来られなければ、弟子として従うようにはならなかった者たちだったのです。十二人全員のことは伝えられていませんが、福音書に伝えられている限り、彼らは自分から求めて主イエスに近づき、弟子入りした者はいませんでした。近づいて来られた主イエスに、いつのまにか従う者とされていたのです。誤解を恐れずに言えば、彼らは「折伏」されたのではないのです。ただ、主イエスという一人の人と出会い、共に歩み、共に生きる人生を開かれていったのです。

自分の持ち舟を主イエスにお貸ししたシモン・ペトロは、「沖に漕ぎ出して…」と主イエスに求められ、渋々、それに応じました。そのとき、網を降ろして彼が経験したのは、単なる「大漁の奇跡」ではなかったのでしょうか。シモン・ペトロが示されたのは、彼自身の舟がいっぱいにされる幻だったのです。彼自身の人生そのものである舟に、多くの人を迎えるようになる幻を、見せられたのです。

その舟を迎える一人ひとりが、あの主イエスそのお方に他ならないと、ペトロが気づいたのは、主イエスが十字架で死なれてからであったのかもしれませんが、いいえ、彼らがそう気づくようになるために、主イエスは、弟子たちと共に十字架への道を、死に至る人生を、旅して行かれるのです。